



# 新潟の水辺だより

Vol.34

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1995年10月20日 Vol.34

●事務局 〒950 新潟市大学南1丁目7821-5 (株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134

●編集 〒950 新潟市河渡2-2-8 (株)サザンウインド内 Phone 025-271-7515 Fax 025-271-1884

## TOPICS

### 『E(交流)ボートinシャクナゲ湖』 新潟の水辺を考える会 長井 一義

#### 「カワセミ」決勝進出ならず

8月26日(土)、南魚六日町の三国川ダム・シャクナゲ湖においてE(Exchange)ボート交流会が信濃川ファンクラブ等の主催で行われた。

我が新潟の水辺を考える会でも大熊会長をはじめ10名の精鋭たちが参加した。競技は片道300メートルを往復するもので、参加20チームは5艘ずつの予選で1位のみが決勝に進める。予選2番目に出場した「カワセミ」は出足好調であったが折り返し地点のヅイに舵が引っかけり5位に…。



スタート直前、手前から2番目が「カワセミ」

昼食は星鳥さん特性のアサリうどんに舌鼓を打ち、暑い日差しと暑い競技にExchange(交流)が深まった一日となった。



出足好調な「カワセミ」

ここ三国川ダムは魚野川の支流三国川上流に、地域に開かれた多目的ダムとして建設された新しいダムである。シャクナゲ湖周辺の景観は素晴らしく、麓には五十沢温泉もあり、再び訪れたい水辺の一つとなった。

お疲れさまでした。



予選5位に呆然とする「カワセミ」  
以上ビデオ撮影は長井ひかり(小3の女子)

### 『水辺の真のパートナーはどこに?』 信濃川ファンクラブ世話人兼務 相楽 治

95年夏の水辺はいつになく暑かった。神戸大震災、サリン事件の寒々とした出来事の反動でそう感じるのだろうか。いやいやそうではないのだ。川をめぐって一つは今までの流れの逆流と思える河川審議会小委員会の答申「今後の河川環境のあり方について」。二つは信濃川の流域の産・官・学・野(民)の交流連携の仕組み信濃川ファンクラブの立上がり。三つは具体的な交流連携事業として通船川ネットの市民による研究活動の盛り上がり。信濃川沿川の川と道の連携フォーラム第二弾。行政・企業・市民・魚の代理人の参加した水郷水都全国会議横浜大会。ダム湖を使った交流、教育、生態学、環境、地球の頭文字をとったEボートの開催。さらにそれを確認する

場としての静岡での全国水環境交流会と続げざまに大きな流れがあった。もちろん、課題は大きい。

#### ・川と地域の関わりの再生をめざして

この夏の信越地域の大きな水害は治水の対象としての川、昨夏の渇水は水資源の対象としての川をそれぞれ私たちに意識させた。治水や利水の川づくりが大半を占めているにもかかわらず親水や生物に配慮した川づくりも着実に進んでいる。その中で問題となっているのは「いったい、本来の川とは?」という問い掛けが不十分なことである。答申の一つにあげられている川と地域の関わりの再生は本来の川を地域を構成する産・官・学・野の対等な関係=パートナーシップによって明らかにしてゆくことであろう。その意味では交流から信頼関係を築いていく時代、連携を模索しなければならぬ時代に入ったと言える。全国水環境交流会ではそのパートナーシップをどのようにして築いていくべきかが論議された。産声を上げたばかりの信濃川ファンクラブは文字通りパートナーシップによる河川環境づくりの実践の「場」である。既にEボートやザ・フォーラム、川の心を呑む会(10月30日)の開催、信濃川音楽祭(10月31日~11月5日)の支援が実践或いは予定されている。私見だがファンクラブは多くの人々の賛同と参加支援を得るため流域各地の団体、個人の活動、研究を支援する情報、資金、人材、技術、アイデア、ボランティアのトラストを目指すべきと思う。まだ船出したばかりだが今だからこそファンクラブはこうあってほしいという厳しくも温かいメッセージを数多く寄せてほしい。

シベリアネイチャリングツアー  
井上 信夫ホル川流域の森と川・シベリア・ネイチャリング  
ツアー報告 その2

世話人・井上 信夫



ホル川の支川の支川・ニヤオハ川の景観

9月13日午後、私たちは再びホル川の畔に立っていた。6月には日産チェリーバンの中古車で、落ちた木橋を迂回しながらハバロフスクから7時間半もかかった行程を、今回は大型ヘリで約50分のフライトである。小さな丸窓から見下ろす森は、期待に違わぬ美しく壮大な眺めであった。広葉樹が主体の丸い樹冠が延々と広がり、山々の稜線は柔らかく見える。ちょうど紅葉も始まり、黄色の木々の間に深緑の針葉樹が散在している。ヘリから見るホル川は赤く濁っていた。よほどの増水らしい。降り立ってみると確かに前回より2mほど水位が上昇している。実際にボートで支流を巡ってみて、水の豊かさを改めて実感した。川は谷状に狭まった部分では急流をなし、少しでも平坦な所では森の中に流れ込む。川面の方が林床より高いのである。その流れは幾筋もの派川となって森を巡り、再びもとの川に合流する。原生の森の中では、水の流れを妨げるものは何もないのである。

## ・豊かな森の動物たち

シホテアリンの豊かな森には、世界的に極めて貴重なシベリアトラをはじめ、数多くの哺乳動物が生息している。その多くが、かつて我が国に分布していた種類である。ちなみに地質時代までさかのぼれば、日本列島にもトラやオオヤマネコ・ヘラジカ・トナカイなどが住んでいた時代があった。氷期に海水面が下がり、陸続きとなった大陸から渡来したこれらの大形動物たちは、海峡の成立に伴う気象変動や植生の変化、古代人による狩猟圧等によって日本列島から姿を消していった。

最も川と縁が深い哺乳類であるカワウソは、我が国では絶滅の瀬戸際にあるが、ホル川流域では岸辺の泥の上に残された特徴的な足跡を各所で見

ることができる。

## ・狩人やシベリア先住民が守る森

ところで、シホテアリン山脈でも、深刻な森林伐採にさらされている地域がある。日本海側斜面では、広大な伐採跡や、赤茶色の林道が目立つ。一方、分水嶺を越えたホル川流域にはうっそうとした密林(タイガ)が残されている。

この違いは単に材木の搬出の難易度によるものだけではないようだ。現地を訪れて答えが得られたが、森や川と深い関わりを持った人々が住んでいるか否かが、命運を分けたのである。

## ・シベリアに川の原点を見る

私たちが自然探訪の旅で訪れた川は、幸いにもどの川も生き生きしていた。ダムや堤防に阻まれることなく、岩をはみ森の中を自由に蛇行し、周囲の地形に合わせて早瀬と淵を正確に形成し、時に幾筋もの分流をなしていた。

国土の狭い我が国に、広大なシベリアと同じ原生自然の姿を求めることには無理であろう。しかしながら、人間が巨大技術を手にする前、大自然に対する畏敬の念を持ち続けていた時代までは、このホル川とそっくりの景観が信濃川でも見られたに違いない。

今、景観や自然を重視し、生き物に配慮したと称する施設や構造物が各地にできつつある。確かにすぐれた設計思想に裏打ちされた好事例もあるが、中には“自然”の意味を全く取り違えたものや、現存の自然や景観を生かすことなく、金太郎飴のような変哲もない施設に置き換えただけのものも少なくない。回りの自然を評価し、これに手を加えようとするとき、私は常々人と自然が折り合って生きていた時代の原風景を原点とすべきだと考えている。ヘドロに埋もれた現状を基点にしたのでは、豊かな発想は生まれてくるはずがないからである。

シベリアの森と川は、人間の手垢のつかない生まれたままの姿である。行くたびに森の息吹や川の躍動を実感し、動植物や森に生きる人々のたくまじさに圧倒される。この原生自然は、日頃病みきった山や川を見続けている私たちの自然観のパロメーターを補正してくれる。

この感動を共有しようと企画したのが今回のネイチャリングツアーで、水辺の会から高橋・鶴間の両氏が参加された。その様子は新潟日報の鶴間さんが夕刊に連載された。また、安塚町のスノーマンネットに井上が連載中である。私たちのシベリア探訪の旅は、これからも続く。

シベリアの川下り・食の編・・・シベリアネ  
イチャリングツアー 編集鳥 高橋 正良

井上 信夫さんに勧められて、少々の身の危険を感じながらシベリア・ネーチャリング・ツアーに参加した。しかし、案ずるより生むがやすし、という結果であり、新潟日報の鶴間 尚さんの夕刊連載の通り、本物の自然を実感する旅であった。



「朝の食事」—チュケン川の中州にて

ハバロフスクからヘリコプターをチャーターし、約1時間南東に飛んだアムール川の3次支流チュケン川の中州に3泊、60km下った2次支流ホル川のキャンプサイトに2泊した。ここは「デルスー・ウザラ」(ウラジミール・アルセーニエフ著、長谷川四郎訳、河出文庫)の舞台から北へ50km。晴れた日中は汗ばむほどの暑さと早朝はテントに霜がつくほどの寒暖の激しさ。川下りとテント暮らしの生活の楽しみは、「食べる」と「見る」の2つに尽きた。



井上さんが料理した「ハリウスの蒸し焼き」

●ハリウス調理法いろいろ

ハリウスは日本名「花魚」で繁殖期のオイカワに負けないくらい派手な色と大きな背びれを持っている。釣り音痴の私は、渡辺俊英さん(小千谷市)から借りた毛バリ付きの竿で半日、20cm以上のモノが40匹も釣れた。勿論小さいモノはリリースしての話。ハリウスはどんな調理

方法で食べておいしい。まず、塩焼き、さらにムニエル、醤油で煮る、開いて一塩干物、フキの葉に包んで蒸し焼き。

●イズューブルの瓶詰め

イズューブルは「デルスー・ウザラ」にも登場する体重150kgに達するアカシカのこと。夜、満天の星を見ながら長く響くその声を聞いた。地元の漁師たちは塩茹でにしたイズューブルの肉を瓶詰めにして大切に保存しておく。タマネギを炒め、瓶の肉をほおりこんで混ぜあわせる。これを茹でたジャガイモやソバ、コメにぶっかけて食べる。多少塩がきつい、日中のハードな行程で汗をかいた身体にはちょうどいい。



「夜の食事」—イズューブルぶっかけごはん、パンとサラダ

●飲み物

水は川の水を直接飲む。少量しか飲まなかったためお腹もこわさなかった。紅茶は貴重品だが、やたらに飲む。やかんに川の水をくんで沸騰させ、ごく少量の紅茶をいれ、食前食後に飲む。蜂蜜、コンデンスミルク、砂糖、好みのモノをたっぷりといれる。さらに森でとれたレモンニッケやコケモモなどの果実をいれビタミンの補給をする。冷え込んだ早朝、身体にしみわたる紅茶が今でも懐かしい。

●おやつ

レモンニッケはチョウセンゴミシのことで、十勝の間でも貴重品扱いしている。シベリアでは川岸の日当たりがいいところにいくらかもある。渡辺 俊英さんのおかげでホットケーキにこれを入れて焼いてもらった。松ヤニ臭さが少し消え、すっぱみがケーキの甘みと調和しておいしいおやつとなった。蜂蜜をたっぷりかけて食べたなら、紅茶がまた飲みたくなる。

## 川と人間との共存

## 釜川(宇都宮市)、巴波川(栃木市)を訪ねて

8月14日午前6時鳥屋野農協前に集まった一行11人、大熊孝教授を先頭に3台の自家用車に分乗して一路宇都宮市へ。車窓から見える景色は今年の豊作が約束されているかのように青い稲穂がたなびき、この猛暑が秋の収穫をもたらしてくれるんだなあと感じながら磐越自動車道、東北自動車道と高速道路を乗り継ぎ目的地、宇都宮市役所に着いたのは11時であった。

市役所の係員(下水道部 河川課の京谷さん、中島さん、石川さん)より宇都宮市を流れる釜川の説明をいただいた。この川は、まさに市内の中心地を流れており市民の憩いの川にもなっている。全国的にも珍しく2重構造になっており下層に生活排水、汚水が流れ上層部は雨水のみということで水量も少なく、もう少し川のイメージがあればという感じがした。当時、建設省から2重構造の川の建設には猛反対を受けながら巨額な費用で完成したという。多くの水害から守るため宇都宮市ではこの方法しかないという思いで建設したのであるが都市化が進む中で、この川の持つ意義も薄れてくるのではないかと思われる。水に親しみ、水と共生していくための川のあり方が今後問われるのではないだろうか。

昼食は、宇都宮名物の餃子を食べ一行は第2の目的地である栃木市へと車を走らせる。その川の名は「巴波川」という。市内をゆったりと貫流している巴波川をゆっくりと歩く。そこには、黒塀の続く屋敷やガス灯が残る明治時代の建物が残り、時の流れが一瞬止まっているのではないかと錯覚さえ覚えた。

まさにその町の歴史と川が共存しているのである。かつてはこの川も江戸から明治にかけては物資を運んだ多くの船が行き交っていて大変な賑いを見せていたのだろう。塚田記念館等当時の面影を残す建物に歴史の思いを馳せると川の鯉も私たちを快く歓迎してくれた。巴波川は、市民にとってかけがえのない川であると同時に栃木市の観光に大きな役割を果たしているのだ。

夏の日、走り走りに2つの川を見学してみても川の思いは今まで以上に大きく広がる。

川は、街づくりのキーポイントである。

梶 瑤子



栃木市内を流れる巴波川

## 富山市 松川・いたち川を訪ねて



観音様や地藏尊が祀られている富山市街中心部

9月10日(日)地元の観光ボランティアの方々のご案内で、富山市街中心に位置する、神通川をショートカットしてできた松川と「蛭川」で知られるいたち川の川辺を散策した。

川作りへの積極的な住民参加は無かったらしいが、いただいた手作りマップの内容は、これからの通船川にも参考になりそうなものだった。

川の水は、思いの外澄んでおり、鯉の泳ぐ姿をはっきり見る事ができた。散策途中、泡だらけの家庭用排水が流入しているのを目撃し、富栄養化が進んでいるのではないかと声も上がった。二川合流点では、アオサギを発見。

川辺には、桜、銀杏、柳などの沢山の樹々が植えられており、特に桜並木は立派で、花の季節には多勢の人で賑わうらしい。また、松川には、遊覧船が通っており、乗ってみたい誘惑にかられたが、時間の関係上先を急ぐ他はなかった。

いたる所に、観音様や地藏尊が祀られており、この地の人々の信仰心の深さをうかがえた。名水と呼ばれる湧水も3~4ヶ所も有り、水量の豊かさを知った。

橋の大きさやデザインも様々で、特に昔あった橋を復元したという舟橋の形は面白く、その近くで売っていた手作りアイスの味と共に、忘れ難い印象が残った。

柵も、金属製あり、生垣あり、と、清掃等の維持管理に加えて、町内毎の色々な工夫や個性が表われていた。

戸枝 邦子

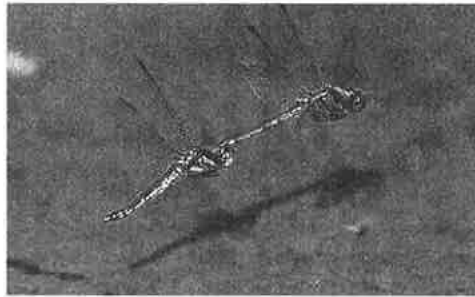
## アキアカネ

「夕焼け小焼けの赤とんぼ」の代表種で、トウガラシトンボと呼ぶ地方もある。

6月頃、平野部の水域で羽化し、夏の間は山地で避暑生活をおくり、9~10月にかけて赤化して下山する。稲刈りのコンバインにぶつかって来るほど、過密な集団となって飛翔することも希ではない。

8月頃、二王子岳やエブリサシに登ると、おびたしい避暑軍団と会える。

因みに、新潟市内でキの字型飛行をして、



よく車に衝突するトンボのほとんどは、ノシメトンボで、トウガラシ色にはならない。

石月 升

## タコノアシ

酢だこや刺身のタコではなく、レッキとしたユキノシタ科の植物である。

河川や泥湿地を好む多年草であるが湿地の開発等で自生地（ひとりで生える場所）が消失しており、絶滅危急種に指定されている。8~9月頃、茎頂に10cm位の花序枝を伸ばし、黄白色の細い花を多くつける。その種子が命名の由来であろう。阿賀野川や信濃川の高水敷の一部にからうじて生きのびているが洪水時に突然流失してしまうなど生育基盤は極めて不安定である。或いはカワラナデシコのように移動癖がある植物なのかも知れない。いずれにせよ、大切に保護したい希少種である。

笹原 治



## 通船川のバンの親子

巷の人々には忘れ去られた通船川にも、どっこい動物たちは生きている。木工団地わきにかかる柳橋から、川面を泳ぐ1羽のバンが見えた。どうやって上ったものか数羽のヒナが矢板護岸の上の草むらでピーピー鳴いていた。やがて崩れかけた斜面を伝って水面に下りて親鳥と合流、ガツボの上で入念に羽づくろいを始めた。対岸には、甲羅を干すクサガメの姿も。自転車やバイク、車が行き交う喧噪な小さな橋の下で、人知れずひたむきに日々の暮らしを営む動物たち...

井上 信夫



ガツボ（マコモ）の上でくつろぐ

## 通船川カヌー下り

水内 邦夫・佐々木 専

私たちは、新潟大学の4年生で大熊先生の研究室に所属し、通船川を卒業論文のテーマにしています。そのため8月4日に、世話人である相楽さんの協力により私たちは、通船川をカヌーで下りました。今回はその川下りをした時の話をさせていただきます。

当日は、津島運動広場の付近からカヌーを降ろして出発し、途中第2貯木場で昼食をとり、山ノ下排水機場開門まで下りました。ただ普通の川下りとは違い通船川は流速が遅い上に、上に向かい風が強く、カヌーを漕いで下ってきた相楽さんにとっては大変な川下りだったと思います。



船長（相楽さん）と供に漕いだカヌー

普段とは違った視点から通船川を見て感じたのは、思っていたよりは自然が残っているということでした。残念ながらカワセミは見ることができませんでしたが、マコモやヨシの生えているところではカモやカメを、それ以外の場所でもゴイサギやイトトンボなどを見ることができました。しかし、自然がおもっていたよりも残っていたという一方で、川の水がとても汚いということも同時に感じました。前日までの大雨の影響もあったと思いますが、それ以外にも原因があったのではないかと思います。

その日の昼食は、川下りの途中、川のほとりところに設置されているはしごを上って、ジャスコ新潟東店でおにぎりを買いました。その後、再び川を下り、少し下流にある、第2貯木場に浮かべられている丸太の上で食べました。丸太の上は、カヌーの上よりも安定しており、のんびりと食べることができました。丸太の上では、私たち以外にもアオサギなど多く鳥たちが羽を休めていました。一般の人は立ち入ることができないので、ここは鳥たちのオアシスとなっているようでした。後半につづく。



丸太の上での昼食

水内 邦夫

後半は、私、佐々木 専が担当します。

昼食をとった後、私達3人はさらなる通船川の魅力の奥地へと進むことにした。少し下ると川幅がぐっと広がり、ため池の様なたたずまいをみせる場所が存在していた。そこには僕が私達の進路をさえぎっていた。船長（相楽さん）が言った。「ここは第一貯木場だ。もう私達の旅は終かもしれないぞ。」

以下2人のメンバーも落胆の色は隠せなかった。そんな時、ふと見上げると、筏に乗った年配の男達がこちらを見て微笑んでいた。彼らは、通船川と暮らしを共にしている心やさしい筏乗りであった。そのうちの一人が私達のために、すでに組んだ筏をわざわざばらして道を開けてくれた。この材は何であるかという船長の質問にも、輸入のラワン材であると心よく答えてくれた。

川の旅も出会いである。



通船川と供に暮らす心やさしい筏乗りさん達

次に通船川は、私達を工業地帯へと導いてくれた。そこには黒光りする煙突、毛細血管のように張りめぐらされたパイプ、まるで僕達の進入を拒んでいるよう異臭。今までのどかな風景とは一変して、工業化されていく地球の嘆きと、それを軽視して文化的な生活を営んでいる現代人の裏側のようなものを感じた。

そろそろ旅の終わりが近づき、山の排水機場が視界に入ってきた。3人はそれぞれ今日の旅の思い出（カモ、かめ、サギと共に食べたジャスコのおにぎり・・・）を思い返しつづ開門へと近づいていった。ゲートの向こうは2m程水位が高い。それは海面の高さである。進入用の信号が赤から青へと変わり、低水位側の第一のゲートがまず開き、その中へと船を進め、続けてそのゲートが閉じた。すると、その職員の方が、「船が転がるとまずいのでロープを握れ。」というので、ドキドキしながらロープをしっかりと握った。すると、高水位側のゲートが少し開き大量の水が流れ込んできて、みるみるうちに、ボートが上昇していった。その風景は、「モーゼの十戒」を彷彿させるものであった。ここで私達の旅は終わりである。

このカヌーで下った通船川は、私達に多くの事を感じさせてくれた。矢板で護岸した川では、川と水辺をつなぐものは、はしごしかないこと。以外と自然が多く残っていたこと。

十キロ未満の旅であったが、自然、農業、林業、工業など数多くのことをかいま見ることができた。みなさんもこんな素晴らしいカヌーの旅を味わっては、どうでしょうか。

佐々木 専

## 会員紹介

# MEMBER'S

# S



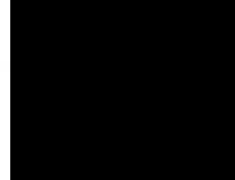
藤田 真寿美



この8月20日の誕生日に入会、母の実家岐阜市生まれ、4歳の時、父の赴任以来(名古屋)新潟市に在住。高山線・沿線を通る水面を車窓から眺め、長良川をよく祖父母と散歩した記憶の中にきれいな川の流れたことが心に残っております。川は昔の様に、生き生きと流れ私達を育み、安らぎを与えるものとして、次の世代にバトンしたいです。趣味・カジカが弾き、現在、1210県民会館で交響曲第九番、第四楽章合唱に出演するため励んでおります。



吉永 清人



本年より参加。九州佐賀県武雄市生まれ。これまで博多、神戸、東京、那覇、熊本、新潟と水辺の町転々としてきました。学生時代は、ワングルで山と溪谷に親しみ、最近、家族とのキャンプや家庭菜園に精を出しています。



石井 哲也

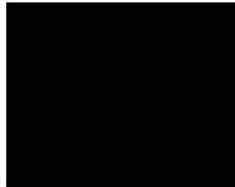


山もすばらしいと思うが、やっぱり水辺。我々が生活している中で、水は貴重なものであり、川下りをしてみると水辺のすばらしさが、一層よく理解できる。

これからも、遊びを通して、皆さんの仲間に入りたいと思うのでよろしくおねがいします。



小出 <sup>ねえお</sup>子恵出



小・中学校とも私達が卒業するのを待ってプールは出来た、という世代です。家から5km以上離れた五十嵐川で泳ぎを覚えました。この川を使っただけで「ふるさと祭」で今年も楽しみました。が、泳ぎを覚えた頃にいたカジカなどは何処へ。



鈴木 順子

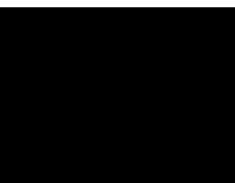


私の住んでいる所は、白鳥がねぐらとしている鳥屋野潟のそばです。都会のまん中で人と鳥が共存している。自然豊かな宝の水辺です。すばらしい、宝物を子から孫へと伝えたいと思っています。

私は、新潟の水辺のことを、色々知りたいので、会員の皆様よろしくおねがいいたします。



矢部 孝男



この4月から、文化現場参加に際して入会いたします。10年前に東京からUターン。こちらでは、主に雑誌関係の仕事に関わりながら、今日に至っております。新潟に根を降ろして自分が何ができるかをずっと考え続けていたような(今も)気がします。

# EVENT & BOOKS

## イベント情報

### 1 全国花と緑のフェスティバル『はなばなし新津』

日 時 ● 1995年10月28日(土)～10月29日(日) 午後1時東  
場所/申込先 ● 新津市花き総合センター (0250-24-2111)  
内 容 ● トーク「花ばなし新津」の「か・か・か」(華しい花じゅうたん)  
主催: 自治省・財自治総合センター・新潟県・新津市

### 3 「川」の心(波動)を飲む会

日 時 ● 1995年10月30日(月) 午後6:00～午後8:00  
場 所 ● 長岡グランドホテル 悠久の間 (5,000円)  
内 容 ● 全国各地「川」の文字が付くお酒の展示  
・試飲/ゲスト坂田 明(ジャズミュージシャン)  
・お土産「冷酒用カットグラス(1,500円相当)」を記念にお持ち帰り  
・抽選により「長岡花火'96カレンダー」プレゼント  
主催: しなの川音楽祭実行委員会 (0258-32-4500)

### 5 人間らしい都市を考える会 第2回例会

日 時 ● 1995年11月11日(土)午後5:00  
場 所 ● 東北電力パレット  
内 容 ● テマ「新潟方式の新交通システム構想」講師 堀 淳士  
主催: 人間らしい都市を考える会 (025-265-7752)

### 7 平成7年度まちづくりシンポジウム

日 時 ● 1995年11月22日(水)～11月23(木)  
場 所 ● 津南町マウンテンパーク津南KAGAN  
内 容 ● 仮テーマ「広域連携による地域づくり」その役割と可能性をさぐる  
主催: 新潟県企画調整部地域政策課 (025-285-5511)

### 2 川舟ウォッチング～通船川と比べてみよう(景観を)～

日 時 ● 1995年10月29日(日)午前8:30東地区公民館事務室前ロビー前集合～  
場 所 ● 小阿賀野川、東地区公民館  
内 容 ● 川舟に乗り、川辺の植物、鳥・水の流れの観察とワークショップ/  
定員50人/参加費1500円(資料代・保険料・昼食代) 主催: 東地区公民館、通船川ルネッサンス21、新潟の水辺を考える会

### 4 「縄文・火えん」Part II

日 時 ● 1995年10月31日(火)～11月5日(日)  
場 所 ● ハイブ長岡・新潟近代美術館  
内 容 ● 31日炎のトガ1日しなの川縄文祭'95/31～1日しなの川音楽祭'95/31～5日  
信濃川絵画のカーニバル主催: しなの川音楽祭実行委員会 (0258-32-4500)

### 6 水辺シンポジウム『通船川の夢を語る』(仮称)

日 時 ● 1995年11月18日(土)午後1時30分～午後4時30分  
場 所 ● 新潟市万代市民会館  
内 容 ● ロケレ(役割分担議論ゲーム)通船川の歴史と夢(通船川の活動報告会)「通船川にける夢」主催: 新潟市東地区公民館、新潟の水辺を考える会、通船川ルネッサンス (025-263-2733)

## 書籍情報

### 1 「歴史的文化遺産が生きるまち」

著 者 ● 日本の宝・鹿兒島の石橋を考える全国連絡会議一編  
出版社 ● 東京堂出版 (定価2,500円)  
内 容 ● 「美術品や芸術品であれば、ほかの場所に移したとしても、その文化的価値が失われるわけではない。しかし、五大石橋はそうではない。(略)それは鹿兒島のまちの骨格的なシステムであり、治水システムそのものだからである。歴史的土木文化遺産は、だから、その場所において機能し続けてこそ、文化財としての真の価値が発揮される。」(吉村 伸一「歴史的土木遺産の保存と甲突川治水」より)



## 新潟の水辺99選 馬越島下手

長岡市下流、蔵王橋の左岸からカヌーで出発。広い川幅ながら右に左へと流れは変化する。一様に見える川の内に平瀬瀬が現れる。以外に楽しいコースだ。自然な岸の木々、中州の鳥達を眺めながら大いなる流れに乗ってグングン下ってゆく。

馬越島が迫る板橋手前から、さすが大河だなどの思いが込め、雄大な景色に心身を奪われる。1kmもあろう川幅、国上山、弥彦山を正面に、広すぎて、美しく、クラクラしながら漂ってゆく。 高橋 裕雄



## 編集後記

最近、ありがたいことに水辺だよりは、会員からの原稿の文字数が多くレイアウトに困るほどだ。原稿を活かすために文字を小さくするにも限界がある。編集自体たいへん楽しい仕事ではあるが、2ヶ月に1度のインターバルが非常に早く感じる。

富山行きでは、往路で姫川の災害現場、復路で新潟市の内川も見学した。土石流の被害状況や通船川に通じる川づくりに関しては、紙面の関係でまたの機会にレポートしていただきたい。これらの情報は11月18日に開催される「通船川の夢を語る」シンポジウムに活かされることになる。これは市民による合意形成を目指す企画として、新潟市東地区公民館や通船川ルネッサンス21の皆さんと共同開催する画期的なシンポジウムだ。

なお、栃木県と富山県の都市河川を見学に行った際、現地の方々にお世話になった。この場を借りて改めてご案内いただいた方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。

編集長 (へんしゅうちょう) 高橋 正良